

3. サミット 開会

《 2011 全国コットンサミット in 岸和田 開催概要 》

開催日時	2011年5月21日土曜日
開催場所	岸和田市立 浪切ホール 4階
主催団体	全国コットンサミット実行委員会 岸和田市、岸和田商工会議所、夢つむぎ会
事務局	㈱大阪繊維リソースセンター
プログラム	第一部 近藤健一とコシノユマの幸せトーク 第二部 全国各地からの取組み内容の報告 第三部 交流・懇親会
集客数	500人（第一部から第三部まで含む）

まず、「全国コットンサミット in 岸和田」開催を、近藤健一会長が高らかに宣言した。

続いて、地元岸和田少年少女合唱団による歌唱、「未来へのステップ」、「believe with your smile」が披露され、サミットを華やかに盛り上げた。



続いて、大会会長の岸和田市長野口聖氏が、地元自治体を代表して出席へのお礼、大会発展に期待を寄せた。さらに、経済産業省繊維課長である富吉賢一氏より、将来の繊維産業を考えるサミットの重要性をご指摘いただいた。

岸和田市長
野口 聖

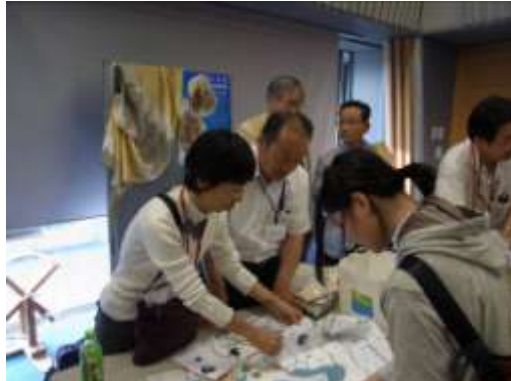


経済産業省 繊維課長
富吉 賢一

大変たくさんの聴衆の方々が訪れ、岸和田市の浪切ホールでは立ち見の方がでた。



会場は、全国各地で綿花栽培を行う方々の糸や製品で飾り付けられた。



4. サミット第1部 幸せトーク

続いて、大正紡績(株)近藤健一と、小篠綾子さんの孫でコシノユマさん¹の二人で、「コットンと生活」を視点を語り合った。将来の日本でのものづくりのこと、子供のこと、オーガニックコットンのことなど。



4-1 綿花との関わり

近藤健一（以降、近藤）

2006年のデータになりますが世界の繊維の需要割合は、化学繊維が60%、天然繊維40%です。2050年を想定しますと、石油資源を長続きさせるためには、できるだけ化学繊維のポリエステルとかアクリルとかナイロンの割合を天然繊維に置き換えてあげないといけない。

コットンの栽培地は北緯45度のウルムチから南緯35度のナモイって言ってブリスベンとシドニーの間ぐらいまで、赤道をはさんだ約108カ国です。これら108カ国以外にも、将来的には150カ国ぐらいに栽培国を広げていかないと、2050年ごろ皆さまが衣服をまとっていくことが難しいと思われます。

石油資源に依存しすぎず、コットンをもっと栽培し、衣服等に使いければ、資源問題や地球環境問題により対応ができると思います。

ユマさん、コットンとの出会ってどんなものでした？

コシノユマさん（以降、コシノさん）

数年前に自分がブランドを立ち上げて、ちょうどデニムブームだったんですね。私のコレクションもほとんどデニムで、その当時は岡山県の児島の方

¹ コシノヒロコさんの次女である。

に通いつめておりましたが、その当時に Cotton の博士がいるということで、近藤さんを紹介され、大正紡績にお伺いしました。その当時世の中は景気も良く、色んな綿産地、機屋さんと仕事をして、綿素材の奥深さを知りました。

3年前に出産し、女の子を授かりました。それからまたさらに、Cotton との付き合いが深まったように思います。できるだけオーガニック Cotton の肌着など Cotton を通して、食育というように「衣を教育」していきたいなと思っています。

近藤

Cotton ってすごいんだよね。綿をとった種は、搾れば綿実油、高級油でしょう。その油粕は、野菜とか花にすごくいい肥料なんです。だから Cotton って本当捨てる所ないんだよね。また、石油製品と違って綿は土に戻せるところが環境に優れた素材なんだよね。



コシノさん

なるほど、Cotton は素材としても、ピカーですね。子育てを通じて、Cotton の重要性を再認識してます。たぶんトレーサビリティとか安全とか全て人間のエネルギーがその一つの商品そのものに伝わっていることを体で感じて、だからそれを好んで使って、生活しているのではないかなと思っています。



4-2 東北震災とコットン



近藤

2011年3月11日東北地方で未曾有の大震災があり、たくさんの方々が亡くなられ、被災されご苦労されておられます。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

あの時から、日本は大きく変わったんだと思います。価値観、ライフスタイル、いや変わらないといけない。特に、東北は日本有数の農業、漁業地帯であり、そこが被災した影響は測り知れません。特に、おいしいお米を生産していた農業、農家の方々は田畑が海水をかぶり、農業を続けるのが困難になっています。

そうした状況を打破し、元のようにおいしい水稻を作ってほしい、農業を続けてほしいということを強く願い、東北の地に、コットンを植えています。植え付けたコットンが大きく育つように、予定通り田畑から塩が抜けるように、努力していきます。

コシノさん

私も震災後、個人的にも色々な支援をさせていただいておりまして、こういうことに携われること自体が本当に感謝です。南相馬市の方に支援物資を送ったりしました。私の元部下の実家がいわき市で、大きなかまぼこ工場をしているんですが、お父様が社長様で、ご家族や社員の皆さんを助けて、ご自身は亡くなられ、つらい思いをしたようです。何か支援をしたいですね。繊維を通して東北を支援できるなんて、近藤さんのご提案を聞かせていただいて、前向きに一緒にやっていきたいなと思っております。

5. サミット第2部 パネルディスカッション

第2部では、日本各地における綿花栽培について、活動報告された。コーディネートするのは、(株)大阪繊維リソースセンター代表取締役松田正夫氏である。ミスター繊維といわれ、繊維産業の活性化に深くかかわり、多大なる貢献をされている。



5-1 北海道/小樽市 こっとんふぁーむ花畑鮮花 宮崎和枝

私はなぜ綿花栽培をしているのか？それはやっぱり私が幼い頃の思い出にありました。私が幼い頃学校から帰ってくると、母はよく布団とか丹前に綿を入れていて、そういう姿を見て育ちました。その綿を入れた布団とかにくるまっていると、すごくあたたかくて、ものすごい温もりがあって、決して豊かではなかったですが、すごく幸せな気持ちでいっぱいになった記憶があります。

栽培環境の厳しい北海道で8年間綿花栽培に取り組んでいます。本当に最初は分からなくて一冊の本を頼りに栽培をしたんですが、やはり北海道という地域は寒いので、育ちが悪くて、どうしていいか分からなくて3年くらい試行錯誤しまして、自分なりに温度と湿度の管理がなされれば、北海道の寒い所でも栽培できるという可能性が感じられました。



綿花栽培の協力者を募り、道内で100名、道外で5名 計105名の方々に綿花栽培に挑戦していただきました。これらの方々を「コットニスト」と称しています。それで出来た綿を集めて、製品を作る目標を温めています。

長野県上田市に位置する信州大学繊維学部は、日本で唯一学部名に繊維の名前を冠しています。繊維の教育と研究ができる学科は先進繊維工学課程のみです。一学年の定員は30名ですので、少数精鋭教育を行っています。大学院の定員は20名ですので、合わせて約160名で、繊維あるいは繊維関連の企業へ人材を派遣しているというのが現状になっております。

先進繊維工学課程では、具体的に繊維材料、テキスタイルデザイン（織物設計、編物設計）、紡績工学、製品の快適性評価、インテリア工学、ニット工学、あわせて、繊維文化財学、ほかに付随する計測・設計・電気・電子やセンサー工学も教えています。さらに繊維製品をどういう風に関係したらいいかということで、スポーツウェア工学とかスポーツ工学とか人間工学ですね。



皆さんが繊維製品を触ったときに肌触りがいいと評価するのはあくまで主観ですので、この主観評価をどのように数値にするか等を研究しています。先進繊維素材の研究とか高機能先進繊維素材、「より美しく、快適な」糸や布のデザインの研究も行っています。あとはスポーツグッズとかスポーツウェアとかファッションウェアの研究・開発、自動車室内インテリアや建築インテリアの開発・研究も行っています。具体的には、ゴルフウェアの快適性を実験し、ゴルフウェアの動きやすさを数字で表わしています。

綿花栽培は、100坪の付属農場で、1958年から品種保存の為に27品種の綿を栽培しています。2年生と3年生の学生実験では、綿花栽培から綿糸作製までを行っています。そこで、学生と皆さんのような綿花栽培を行う方々と交流させていただくことで、学生達の学びの励みになればと思っています。

島田氏

弊社は昭和 58 年から靴下の企画・製造・販売の、いわゆる SPA をやっております。3 年前から会長が原料もつくろうということで、去年は 3.4ha の広陵町の休耕田で、シルバー人材センターの方々と一緒に綿花栽培をしています。

先月の 4 月 10 日ごろなんですが、越智会長から綿花は塩に強いんちゃうかと言われて、東北の被災地に綿花を植え、田畑から塩抜きするんやということで、4 月 28 日に仙台に行き、ホンマに育つか、そして塩分にどれだけ耐えられるのかとか調べるため、宮城県の農業試験場で試験することを了解していただきました。この写真が宮城県名取市の被災した水田です（写真見せる）。ここは、排水溝が壊れてるもんですから、排水溝を修理するために、米を作ってはいけないとされています。農家にとっては、将来がみえない状況なんです。これらを打破して、除塩を綿花でやりましょうとっています。



越智氏

もうすぐ 72 歳になりますが、この 3 月 11 日からワシは泣き崩れた。あの悲惨な津波の光景や被災住民の話を聞いて涙を流した日本人たくさんおると思うよ。よう考えてみたら、綿花は塩害に強い。被災地の田んぼに綿花を三年ぐらい植えたら、だいたい正常の田んぼになるてゆうんで、綿花を植えようやないかと思って、全農とかそういうところに色々に電話したんですけども、現地はそれどころじゃないんです。だから僕は島田さんに、「現地に行って植えい」と言ったんです。

3 年前から広陵町の町長のお世話で、25,000 苗ぐらい栽培している。今回サミットに参加させていただいたのは、東北大震災で被災した農家を救済する活動にご賛同を得たいため。綿花は塩耐性が強く、3 年植えると除塩され元の田畑に戻る。被災した田畑は排水溝などの損傷で作物を植えられない、そんな状態から元に戻し、農家を元気にするには綿花栽培がいいと考える。これから協力してほしい。



私は繊維メーカーで育ちましたけれども、やっぱり現状は厳しいものです。いとへん(業)というのは、こんなに厳しいのかなと若いころから苦勞して夜遅くまで働いて、なんでやるな、ということで、自分でもう少し苦勞を買ってみよやないか、ただ苦勞を買うといっても何をどんな形で苦勞を買ってみたらいいのかなと今の社長にお聞きしますと、自分がやりたいことを見つけるまでに、昔の人のやってたことをもう一回やってみたらどうや、と言われた。それで「何ですのん？」て聞いたら、「昔、家では綿(わた)つくったで」みたいな話があって、「綿(わた)？」って、確かに私ら素材としては綿(めん)という表現で受け入れてましたけど、綿(わた)なんかできるの？って、「いや、やってみたらええやん」って言われて、「そうか、じゃあ作ってみよう」って、単純にそれがスタートでした。「昔、家では綿(わた)つくったで」との知人の指摘から、昔のものづくりに習ってみようと考えたのがきっかけです。



「マイ綿プロジェクト」と称して、いろんな方と綿花を育て、綿繰りなどのワークショップを行っている。栽培からのストーリー性をもった商品として、「新大和木綿物語」を作り、これは種から糸、そして商品に変わる、そのストーリー性を共有していただく方々に同じようにその綿を育てた者で商品を共に開発していこうという形で参画していただいています。

今後この事業は、今までの経験、新しい経験をもとに、この綿作りということが新しい成長分野に、要するに新しい産業や文化、歴史に結びついていって、知識を得た方々がその貴重な経験や知識を持って、今後の人の流れをつくっていこうやないかと思っています。(繊維産業というのは)こういうモーションを起こせる大変楽しみのある産業ではないかということで、今日発表させていただきました。今後も地域振興を目指してがんばっていきます。

昔の大阪は摂津・和泉・河内の国に分かれていました。コットンサミット主催地の岸和田は「大阪いづみ」で和泉木綿の産地、私共の八尾は「大阪かわち」で河内木綿の産地になります。ともに大阪の木綿処ということで、いまも行き来させていただいております。

私は今から 35 年前八尾市在住の木綿研究家の手ほどきを受けたのをきっかけに、河内木綿の藍型染めを行ってきました。河内地方では娘の嫁入りに文様の入った藍木綿で布団や箆笥の油単を作り持たせる習慣があり、吉祥文といわれる鶴亀や牡丹、菊などが好まれ、多く使用されてきました。これらの古布を集め、文様を取り出し、型紙を再生して、藍染めに復活させ、またこの工程や技術を教えることで技の伝承を心がけてきました。



今回このコットンサミットに参加させていただいたのは、昨年 2010 年に大阪府が進めている中央環状線の緑化運動参加の呼びかけに合い、文様藍染めも、河内の地栽培の棉によって織られた木綿が本来の姿ではないかと考え、原点に返って棉作りを始めたことからです。かつて河内の地は、大和川の(川違え)付け替えにより、旧川床にできた広大な新田で棉づくりが盛んに行われ、織られた河内木綿は西日本から北陸に販路が広がっていたと古文書に記されていますが、やがて都市化という時の流れに棉畑は消えました。しかし、今チャンスが与えられました。

河内木綿の復活を願う東大阪・八尾の人たちが手を組んで南北に走る道路沿いに棉を作り、将来一本の棉の道「夢のコットンロード」の実現に向けて歩み始めています。すでに初年度の収穫を見届け、2 年目の今年は参加団体も増え、近くの小学生も棉作りに参加しています。

本日出会った棉作り先人達に今後の取り組みや、収穫後の棉の活用などご指導をお願いします。

5-6 兵庫県/西脇市 大地のぬくもりコットンボール銀行 小野圭耶、

丸山千穂、沼田まきこ、糸瀬由香、吉田あゆ美、百山晃喬^{てるたか}、松尾風花

大地のぬくもりコットンボール銀行は、綿伝来1200年の節目である1999年5月10日に発足しました。「エンヤス織布」の遠藤多久雄さんが、オーストラリアから来られたお客様の「綿織物の産地なのに、なぜコットンが咲いてないの？」という一言から始まりました。

そこから綿作りを通して、心を育む教育をテーマに活動しています。種を資本に全国にコットンを広げて、西脇はコットンボール銀行発祥の地とも言われていました。1999年から4年間は「全国わたわたサミット」というのを西脇コットンボール銀行主催で、西脇で全国コットンボールサミットという形で、100名以上集まったこともあるということです。いまでも西脇の小学校に綿花栽培を指導し、機織りの職人さんたちが教育に携わっています。



【西脇アイシテルPROJECT】というのは、私たちは普段は最先端の織物とかトレンドだとかファッションとかに関わりながら働いています。繊維の元をたどると綿というところに行きつき、体験しながらいまのものづくりの価値観を養っていききたいなということで、地元の魅力あるヒト、モノ、コトを活かして活動しています。

先日、コットンボール銀行宛にもお手紙が届きまして、以前から交流があった石巻小学校から「被災に負けないで今年も綿作りをしたい」というお手紙が届き、私たちが育てた種を送らせていただきました。綿作りを通じて、少しでも気持が前向きになってもらえたらなあと思います。



昔西脇でコットンサミットやっていたと聞いているので、再び西脇で開催していただきたいと思います。綿花栽培を通じて、その土地の人間性だとか、文化を背景とした取り組みを行うことで、子供をはじめファッションに関わる立場の者も、価値観を学べるんだと思います。

5-7 鳥取県/境港市副市長 安倍和海

境港市は魚とゲゲゲの鬼太郎の街といわれていますが、300年以上前からこの「伯州綿」を栽培し、それで生業をたてていました。

鳥取県西部は伯耆（ほうき）の国と言いまして、そのニンベンの伯ですが、これをもって「伯州」と申しておりました。で、伯州綿という風に言っていました。この当時は鳥取藩の財政を9割がた支えていたという記事もございます。私どもの地域は伯州綿だらけだったといわれるぐらい、一生懸命お金を稼いでいたということでございます。この写真は、大正11年に天皇皇后両陛下に献上した伯州綿でございます。当時は足踏みで綿繰りをしていました。中村市長が少年時代の頃までは綿畑がありました。ところがいまはもう全くなかったわけです。絶滅に近い状況だったわけです。



耕作放棄地対策で、ヒマワリを植えたり、そばを植えたり、コスモスを植えたりしましたが、先の伯州綿復活と地域振興を目指して綿花栽培を始めたのがきっかけです。

平成20年から徐々に栽培面積を増やし、昨年度は1.5ha栽培し、1350kg（種付き）の綿が出来ました。この取組は、耕作放棄地対策であると同時に、収穫した綿花からタオルや手ぬぐい、ベビー用品などの製品を開発、また、新たな雇用を生み出し、地域活性化を図ります。挑戦は始まったばかりで、なんとか産業レベルまで行けという市長の指示です。私たちは市の商工農政課が中心となってこの仕事をしております。境港市農業公社、職員は全員兼務でやっております。パソコンをたたいて、すぐ長靴に履きかえて、そして汗をかいた後に、また手を洗って仕事に戻るといふふうに懸命に頑張っております。

6年ほど前に街おこしの一環で、綿の郷を復活させようと考えました。綿を栽培して製品にして販売して稼いでという発想はございません。とにかく昔からの伝統的なこの地域に生まれた子供たちが大きく育っても、綿を見たことないというのでは恥ずかしいと。やはり讃岐は綿どころで昔から伯州綿と同じように京極藩にごぞいまして、綿は藩を支えた、大きな収益源となっていました。そういう意味で、ぜひ子供たちに綿の栽培、綿摘みをしてもらって、綿というのはどんなもんやというのを体験してほしいということから始まりました。



体験工房 というのが資料館にありまして、すでに十数年ほど前から10名ほどのグループが綿を種繰りして糸にして機織りしています。私ら素人目から見ましても、もう玄人並みに機織りが出来てるんじゃないかと思ひまして、今回も展示会に出したらどうかというのもあったんですが、準備不足だったので、次回の境港市でのコットンサミットでは立派な呉服屋のまねごとのようなことをしたいと思っております。

さて、これまで綿繰りが課題だったので、廃品同様の機械を企業から譲り受け、県費で復元再生した。観音寺地域は、これから綿花栽培を一つの方法に地域活性化をより進めたいと考えています。

境港市の副市長さんは挑戦が始まったばかりとおっしゃっていましたが、私どもは挑戦を今から始めようとするところがございます。大きなサミットが開催されることは、色んな方の色んな取り組みが非常に参考になりまして、これは本当に大きな力になると思います。非常にありがたいです。

私が参加していた地域経済の研究会で繊維産業の話になったときに、ある人が「原点に帰って綿作りからはじめてみてはどうか」と発言されました。「きしわたの会」はそれが一つのきっかけで、15年前に発足しました。

私がこのような綿作りをしようと思ったのは、実は地域産業の在り方に疑問を持っていたからです。岸和田市をはじめとして泉州地域は、江戸時代には和泉木綿の産地として、また明治時代以降も産業革命の波に乗って紡績・織布業が大変発展した地域です。全国有数の繊維産地として地域の発展にも大きく貢献してきたのですが、近年はかなり落ち込んでいます。「それは時代の流れや」とか「ほかの産業を考えるべきや」という人が多いのですが、私は「まだ頑張ってる会社も多いのに、簡単に見捨てていいのか」と常々思っていました。そういう訳で「綿作りからはじめてはどうか」という発言に興味を抱いて、繊維産業の応援団として何かできるかなと思ったんです。



岸和田市の協力も得て、約2反の畑を借り綿花を植え、収穫祭として「コットンカーニバル」を開催しました。綿の切り花の販売や、糸紡ぎや機織り、草木染めの体験なども行いました。

しかし、繊維産業の方々とは接点がなく「このような活動でいいのかな」と思っていたころ、大正紡績のことを聞き、近藤さんに会いました。私たちの思いを話し、「綿は数キロぐらいしかないんですけど、それに市民団体なんでお金もありません」と言ったんですが、「それはいいことをされてますね、糸作ってあげますよ」快く引き受けてくれました。

「私たちの綿で糸ができた」と喜んで、地域の業者さんたちに色々お願いに回ったんです。靴下、Tシャツ、産着、タオルとか様々な製品を作っていました。

また、日本には綿繰機がないことから、岸和田市内の近畿職業能力開発大学校の先生にお願いをし、学生さんの課題として電動の綿繰り機を研究・開発してもらいました。その成果から、同じ市内にある野村製作所が苦勞して製品化してくれたのが、展示している「くりくりワン」です。

2004年からは岸和田市中小企業振興会の事業として、「木綿物語プロジェクト」を発足させ、企業者の会「夢つむぎ会」を結成し、様々な製品づくりをすすめました。その製品については「きしわた物語」という名称で商標登録し、毎年「木綿物語フェア」という展示即売会をこの浪切ホールで実施しています。

しかし、多くの課題を抱えています。とりわけ、開発した製品の販路開拓は大きな課題です。

6. サミット 共同宣言

「全国コットンサミット in 岸和田」 宣言文

わが国で本格的な木綿の栽培が始まってから四百数十年が経過。綿花栽培は江戸時代から明治初期にかけて各地に広がり、民衆の生活や文化に大変革をもたらすと共に商品経済を発展させました。さらに明治時代以降は、それらを基盤にして綿紡績、綿織物などの繊維産業を発展させ、日本の近代化を推し進める原動力となり、国民の生活向上にも大きく寄与してきました。

また、戦後日本の復興・発展に際しても繊維産業は大きく貢献してきましたが、現在はアジア諸国の追い上げ等世界経済の環境変化もあり、苦境に立たされています。

振り返ってみれば、わが国の繊維産業は大きな発展を遂げましたが、この百年余りの間、木綿の栽培は一部の地域を除いて顧みられることはありませんでした。木綿が大地の恵みによる産物だということさえ、大多数の国民は実感できなくなっていました。

しかし、織物や衣類は各民族・各地域の生活文化の特性を示す基盤です。その素材が忘れ去られ、さらに製造技術さえ国外に依存するような民族の文化は「根なし草」になりかねません。

そのような状況を打開し、繊維産業の新たな活路をめざす各企業の様々な取組みや、「地域の歴史や文化、産業を見つめ直そう」「まちづくりや観光にも生かしたい」などの思いで綿花栽培に取り組む市民活動が全国各地で生まれ、地道に活動を進めてきました。また、最近では大手企業の一部も木綿栽培に着手するなど、新たな動きも生まれてきました。

そして本日、私たちは岸和田市で開催した「全国コットンサミット」として一堂に集まり、互いの活動の交流を図り、学び合いました。

「幸せトーク」の中では、「コットンで幸せを広げる」ことの大切さを学び、各地の内容豊かな報告を聞く中で、新たな夢と希望を育むことができました。そして、「東日本大震災の津波で被害を受けた農地の再生のために、各地の干拓地で『塩抜き』として栽培され効果をあげてきた綿花栽培で寄り添いたい。」という呼び掛けに共感し、共に協力し合うことも確認しました。

もちろん、国産木綿の復活による新たな繊維産業の再生・創出と言っても、本日の各地の報告が示すように容易なことではありません。この間に失われた機械や技術の再生、国産綿にふさわしい新たな製品の創造や販路の確保等々、障害や困難、課題が山積しています。

しかし、個々の地域や市民、企業では解決困難な課題も、「コットンで幸せを広げよう」を合言葉に、相互に協力・共同の輪を広げ、全国的な連携を生み出せば、新たな展望を切り開くことができると確信します。また、私たちの思いや活動、本日のサミットで示された数々の提起は、今後のわが国の産業や文化の一つの方向をも示したものであると確信します。

そして、私たちはこの「新たな胎動」を一過性のものとし、来年以降も開催場所を変えながら継続してコットンサミットを開催し、交流・連携を図っていくことを確認し合いました。

私たちは、本日参加した各々の個人・団体・企業が協力・連携を深め合いながら新たな一歩を踏み出し、来年境港市で開催されるコットンサミットにその成果を持ち寄ることを誓います。

右、宣言します。

2011年5月21日

「2011全国コットンサミット in 岸和田」

7. 来賓祝辞

来賓の方々が、本サミットに対して、温かいお言葉を頂戴しました。

鳥取県境港市長
中村 勝治



奈良県広陵町長
平岡 仁



香川県観音寺市長
白川 晴司 代理 片山 圭之



奈良県大和高田商工会議所 副会頭
酒本 昌彦



情熱でサミット開会に導いた夢つむぎ会代表の挨拶

辰巳織布(株) 会長
辰巳 美績



最後に、全国コットンサミットの次回開催候補地として、鳥取県境港市に内定した。境港市は、綿花栽培と地域振興を目指し、職員が積極的な活動を行う。自治体、企業、市民が一丸となって活動し始めている。

開催内定を記念して、「全国コットンサミット」の大会旗が、岸和田市長から境港市長に手渡され、次回開催へのバトンタッチがされた、今後ますますの発展を期待している。

